

## § 第二章 第二段の解説

### 第一節

#### 第二段のご科文と大意

#### 真の現世安穩とは

門祖聖人の御科文には「折伏しゃくぶく如説の苦行に因て、疑を設けて呵責ほうぼう謗法の後、現世安穩の勝用あらわすを顕す」とあります。

これはどういう意味かと申しますと、仏説のとおり法難を受けながら折伏行を展開することについて、誰でも起こしやすい疑問をあげます。なぜ、正しいご信心をさせていただいているのに法難ほうなんが起こるのか、どうしてお祖師様のような方が島流しにあうのかという疑問です。これに対して、何もイヤなことが起こらないのが現世安穩というのではなく、法難を引き起こしてでも謗法を折伏して、諸宗が統一され、すべての人々が正法、すなわち上行所伝の御題目のご信心きえに帰依したときこそ、真の現世安穩、真実の平和がもたらされるということを顕わされた一段であるという意味です。

身近な家庭内の信心に例を取りますと、表面上だけ、うまくやっているようでは駄目で、ご信者の家庭でも一人残らず佛立信者になったときは本当に幸せな家族となり、心が結ばれお計らいをいただき、災難もなくなる、だから途中でつらいこともあるかもしれないけれど最後の最後、ひと回り大きな幸せがやってくるように努力しましょうと教えていただいている所です。

### 第二節

#### 過去の如説修行の人たち

#### 本文

問て云く、如説修行の行者は現世安穩なるべし。何が故ぞ三類ごうてきの強敵盛んならんや。答へて云く、釈尊は法華経の為に今度九横の大難に値給ふ。

過去の不輕菩薩は法華經の故に杖木瓦石を蒙り、竺の道生は蘇山に流され、法道三蔵は面に火印をあてられ、師子尊者は頭をはねられ、天台大師は南三北七にあだまれ、伝教大師は六宗にくまれ給へり。此等の佛菩薩大聖等は法華經の行者にして、而も大難に値給へり。此等の人人を如説修行の人といはずば、何くにか如説修行の人を尋ねん

## 現代語訳

問い (法華經には「現世安穩、後生善処」とご利益が頂けると説かれているのですから、如説修行の行者であれば(何事も起こらず)現世の生活は安穩であるはずです。それなのに、なぜ、(日蓮聖人には)三類の強敵が盛んに起こるのでしょうか。

答

(これを説明するのに過去の例を出してみましよう。)釈尊は法華經の(教えを最後に説かれる)ために、そのご生涯の中で九横の大難にお値いになりました。過去の不輕菩薩は法華經の(ご信心を弘め礼拝行を行じた)故に、杖で打たれたり瓦や石を投げつけられたり、(中国では)竺の道生は蘇山(蘇州の虎丘山)に流され、(やはり中国の)法道三蔵は顔面に烙印を押され、インドの師子尊者は頭をはねられ、(中国の隨の)天台大師は江南の三師、江北の七師(南三北七)という当時の中国全土の主立った仏教学者には敵視され、(日本の)伝教大師は六宗に憎まれました。これらの佛や菩薩や大聖人方は法華經の行者でありながら、しかも大難に値われました。これらの人々を如説修行の人といわないのなら、いったいどこに如説修行の人を尋ねたらよいでしょう。

## 解説

門祖聖人の御科文にはここに「如説修行の人の呵責怨嫉の先証を引く」とあります。お祖師様は人一倍、歴史の重要性に着目されていた方でした。古代インドの人はどういうわけか、抽象的思考、時間や空間を超越する真理に対する洞察の能力に優れていました。そのため、釈尊当時でもさまざまなものの考え方、哲学の学派が出そろい六師外道と呼ばれる人々がいろいろな説を述べてい

ました。あるいは六十二見という異なった見解をもつ人々があり、その中で仏教も生まれたのです。ですから、仏教も初期からかなり、論理的思弁を展開しています。二千年も前の仏教の論書などを読んでいますと、これがそんな昔にできた書物かしら、現代よりむしろ緻密な論じ方をしているなあ后感嘆するほどです。その反対に、歴史とか具体的事件については記述することも比較的少なく、時間の観念というか、今は歴史上、どの位置にあるのかという考え方が希薄でした。そのため、インドの歴史、たとえばマウリヤ王朝第三代の王で統一国家建設を果たし、善政を布いたというアショカ王の即位年代(前二六八 二三二)などは外国に残っている資料から推理する以外ありませんでした。古代インドは特にギリシャなどと交渉していたため、ギリシャ側に残された記録が決めてとなったのです。

その傾向は、仏教も異ならず、たとえば釈尊の亡くなられた仏滅年代についてもいまだにはっきりしません。

しかし、歴史をマクロに見る点については優れたものがあり、仏滅後の正法、像法、末法という区分や宇宙の推移を成劫(生成期)、住劫(安定期)、壊劫(滅衰期)、空劫(滅亡期)というように四劫に分けていることなどは説得力を持つものです。

釈尊がご出現された時代とお祖師様のご活躍された時代とでは、二千年の開きがあり、それまでインド、中国、朝鮮、日本やそれ以外の国で仏教伝道の歴史が積み重ねられてきました。そのため、お祖師様には時代意識がひとときわ強く、今はどんな時代で、いったい何をご弘通すべきかという問題意識を常に持っておられました。ですから、どんなときでも過去を振り返り、そのうえで現在、未来のあり方を探るという方式で、ここでもインド、中国、日本の三国の過去の仏教史上の偉大な如説修行の人について検証していくわけです。

それぞれの方のことについて泉日恒上人、石井日受上人の講義本に詳しく出ていますが、調べ直して記します。

## 1 仏の九横の難

九横の難とは釈尊がそのご生涯において高德であるにもかかわらず受けられた多くの難という意味です。横とは専横とか横暴の横で杵をはみ出る、道理に

かなっていない、むちなさまを表します。仏様のように尊崇されるべき方が、あってはならない難に出値われたという意味です。九とは九回とは限らず数が多いことを表し龍樹菩薩の大智度論には十一難、興行起経という経典には十難、妙楽大姉の法華文句記に十難(名目は異なる)、お祖師様の開目抄には十一難、法華行者値難抄には九難があげられています。註1ほかに仏の十難という言い方がされる場合もあります。

ここでは法華行者値難抄にお祖師様が示されている九難をあげます。

孫陀梨謗... 釈尊当時の外道(仏教以外の宗教)を奉ずる人々が計略して起こした事件。孫陀梨(スダリカ-)という娘が釈尊と肉体関係にあるという噂を流し、その後、彼女は外道に殺され祇園精舎に捨てられました。後に、この悪だくみが露見したということです。

旃遮女謗... 旃遮女(チャチャマ 牝カ)は当時のインド一般の宗教である婆羅門教の信者で、釈尊に敵意をもち盥をお腹にいれて釈尊の子供を身籠もったと大衆の前に出て訴えました。ところが、その時、盥がお腹から落ちてしまったという釈尊が濡れ衣を着せられかかった事件です。

調達推山... 調達というのは釈尊の従兄弟の堤婆達多(デバダッタ)のことで阿闍世王(アジャタタトル)と手を組んで堤婆達多は釈尊を殺し教団を奪い、阿闍世は父の頻婆娑羅(ピンピサラ)を殺して王位を篡奪しようと相談しました。堤婆達多は計画通り靈鷲山の麓を通りかかった釈尊めがけて大きな石を転がして殺そうとしました。しかし、その石は砕けて、わずかにそのかけらが釈尊の右足の指に当たり出血しました。後世にはこのように釈尊の御身から出血させるだけでも重罪ということで、出仏身血という名で五逆罪の中に数えいられるようになりました。

瑠璃殺釈... 瑠璃とは毘瑠璃王の略で、毘盧宅迦(ビルダカ)ともいいます。瑠璃王は中インド古王国コーサラ国の王でしたが釈尊の出身の釈迦族に怨みを抱いていました。王は釈迦族が仏陀を招こうとして用意した獅子座に昇り追い払われたことを根に持ち父の波斯匿王(プラセナジット)の死後、即位しますと釈迦族の中心地であるカピラヴァスツを攻略、一族を大量に虐殺しました。しかし最後には釈尊の予言通り、突然の暴風雨でことごとく水没し、王は阿鼻地獄に落ち、宮殿も天火に焼かれたと伝えられます。

(増一阿含經二十六)

釈尊は二度までは瑠璃王の軍隊の通るところで瞑想し、沈黙のうちに攻撃を止めさせられましたが三度目はあえて止められなかったといわれています。ともかく、目の前で同族が虐殺される苦痛を釈尊が味わわれたという悲しい出来事があったのです。

馬麥... 釈尊が阿耆達王(アグニダッタ)の招待でお出かけになったにもかかわらず、外道の策略によって釈尊と御弟子に対しての供養が妨害されてしまい三ヶ月の間、釈尊は馬の飼料である脱穀していない麦を食べられながら法をお説きになったということがありました。

乞食空鉢... 釈尊はある時、外道を信奉する部落に入られました。通常は誰でもその威徳に打たれ、皆が釈尊にご供養申し上げるのですが、この時ばかりは、誰一人ご供養するものがなかったということです。インドでは出家は三衣一鉢といい、三種類の衣と一つの鉢しか所有せず、托鉢を行って毎日、必要な布施供養を受ける慣わしでした。人々の前に出てじっと鉢を持っていれば、その姿を見て功德を積もうと食料その他を寄進するのが常でした。ふつうは、ご供養をいただいた後、法が説かれたのです。ところが、この時ばかりは皆で無視して釈尊といえどもひもじい思いをされなくてはならないということがあったのです。

寒風索衣... 釈尊は一生、教化伝道の旅をされていましたが、その間には厳寒にあい、しかも身を暖められる衣にも不自由され、求められたこともあるということです。

金鏘.....米のとぎ汁という意味で、釈尊が婆羅門城市に入られたとき、王が釈尊に供養することと御法門聴聞を禁じたために釈尊たちは空腹に悩まされました。ようやく老婆の差し出した米のとぎ汁で空腹を満たされたということがありました。

外道讒奏... 外道の六師が組んで、阿闍世王や波斯匿王(プラーセナジット)に仏教は反国家的宗教であると訴え出た(讒奏)ということがありました。開目抄によれば、

「瞿曇(釈尊)は閻浮(世界)第一の大悪人であって、彼がいたる処は三災七難、あらゆる災難が起こります。また、彼のところには衆悪をあつめたようなもの

で、悪い弟子どもがおります。迦葉、舍利弗、目連、須菩提等です。人身を受けた者は忠孝を先とすべきですがのに彼等は瞿曇にだまされ、すかされて父母の教訓を用いないで勝手に出家してしまい王法（世の法律）にそむいて山林に入ってしまう、多数の国を渡り歩き災難をまき散らしています」などと訴え出て、仏教の禁止を計ったのです。

釈尊は五十年の間、法をお説きになり、そのご入滅の時はあらゆる民衆や王に至るまで、多くの人々にそのお徳を慕われ、鳥や獣まで嘆き悲しんだといわれています。しかし、一方では従来のバラモン教やその他の当時の新興宗教ともまったく異なる教えを説かれたために、さまざまな怨嫉、迫害にあわれたことも厳然たる史実なのです。 仏教の特徴は無我説であるといわれます。無我説はさまざまな面がありますが、当時の伝統宗教や新興宗教にいちばん抵触した点は無我説の中でも世界や人間を作り上げたという創造神、また、あらゆる人間の運命までことごとく支配する絶対神、全知全能の神を否定しているところです。神を否定した仏教は当時としては、大変ラディカルな教えで諸宗教の反発は大いに予想されることです。たとえば、イスラム教徒の前で、アッラーの神など架空の存在で、マホメットが砂漠で見た幻覚に過ぎないなどといっただけで、今日でもどんな目に遭うか分かりません。 なお、無我説は決して無靈魂説ではなく、靈魂(梵語のアートマン、ジーバ)の存在を否定するものではありません。註\*2もう一つ、仏教のきわだった特徴はインド古来の身分制であるカースト制度を否定して平等を主張したところです。

ともかく、神を否定した上、人間の平等を唱えた仏教はインドの諸宗教から反発を受けるのですが、そういう教説はすでに、法華経を説かれる以前の方便経において説かれていて釈尊の九横の難もそのときに体験されているのです。しかし、その方便経にしても、これが説かれた目的は最後に法華経を説くためですから法華経による法難とされているのです。

## 2 不軽菩薩の杖木瓦石の難

不軽菩薩の事蹟については第四回目の連載で詳しく書きましたので省略します。

### 3 竺の道生 (? ~ 四三四)

中国、東晋から劉宋の時代にわたって法華經、涅槃經の研究、流布に功績を残しました。俗姓は魏氏ですが後に竺と改めています。竺とはインドという意味ですが、仏教者という意味でしょうし最初の師が竺法汰(三一九~三八七)という人だったからです。彭城(現・江蘇省)に生まれ、十歳頃に出家して、しばらくして後、廬山の慧遠に師事し、その後、法華經の翻訳者として有名な鳩摩羅什の弟子となり研鑽、三千人の弟子の中でも関中の四傑と呼ばれるほどの俊才でした。

鳩摩羅什がなくなった後、四〇九年、建康(南京)に帰り、表面上の字句にこだわらず經文を自由に研究して従来とはかなり異なった新説を発表しました。その一つが「頓悟成仏義」で、修行というものは長い年月がかかるもので生々世々、功德を積み生まれ変わってはまた、功德を積み、そしてようやく悟ることができる、今生では悟れないという漸悟説に対立する画期的なものでした。

そして、法華經については法華義疏という注釈書を著し、その中で四種法輪説を唱えました。これは釈尊の教法は善淨法輪、方便法輪、眞実法輪、無余法輪の四つに分類でき、眞実法輪の法華經が中心であるという説です。ですから、これは天台大師の五時八教説の先駆けとなる説です。

また、当時は六卷泥 經(涅槃經の一種)しか中国に到来していませんでしたが、その研究の結果「闡提成仏」説つまり、闡提(一闡提)という善根を断った人、仏を信ぜず因果の道理を信じない人ですら成仏ができるのであるという説を掲げました。これはいわば、当時はまったく非常識な仏教そのものを否定する説であると仏教界から激しい非難を浴びて追放されました。これは法華經の中で、大乘仏教では一般的に成仏できないと蔑まれていた二乗という人々(自分の成仏だけを求めている人)の成仏、そして悪人の成仏、女性の成仏が説かれていることから、法華經の後に説かれた經文である泥 經には闡提も成仏するということが説かれているに違いない。一部しか訳出されていない六卷泥 經には出ていないが、泥 經全部が訳されれば闡提の成仏が明らかになるであろうと「闡提成仏」の新説を発表したのでした。仏教学者の中でも、ことに智勝法師は道生を憎み朝廷に上奏しました。その結果、追放されて虎丘山に流されました。

はたして、その後、曇無讖(三八五～四三三)訳の四十巻本の大般涅槃経が中国に伝わり、これを入手するに及んでその説の正しいことが証明されました。そこにははっきり「一闡提の人、復た善を断ずと雖も、猶ほ仏性あり」と説かれていたのです。道生を追放した学者らは謝表(謝罪文)を朝廷に提出し、無事、道生は故国に帰ったといわれています。

道生の場合、迫害の直接の原因は涅槃経についての説でしたが、しかし、これも法華経の延長上の事柄であるとすれば、その法難は法華経弘通のためのものであったといえるので、お祖師様は法華経の行者の一人とされているのでしよう。

#### 4 法道三蔵(一〇八六～一一四七)

幼くして真戒大師安恭について出家、永道と名乗り、政和三年(一一一三)、香積院に住し、翌々年には宝覺大師の号を賜りました。宣和元年(一一一九)に時の皇帝、徽宗が道士、林靈素に帰依して道教を国教としました。そして、勅によって仏教を道教と同化するよう進めました。寺院を宮、觀として仏を大覺金仙、僧侶、僧尼を徳士、女徳士としました。影響が残っているのは菩薩を大士と呼んだことで、これは今もなお、そんな歴史を意識することなく意識することなく使っています。

これに対して永道は命を懸けて徽宗皇帝を諫めました。その上書の内容は、「中国においては、かつて三武一宗の法難(北魏の太武帝<在位四二三～四五二>、北周の武帝<在位五六〇～五七八>、唐の武宗<在位八四〇～八四六>の三武および後周の世宗<在位九五四～九五九>の一宗の治下における弾圧、仏教の迫害)が行われたが、いずれもその末路はよくない。仏法を廃するなら、国に災難が起こり、王にも災いがあるに違いない。

罪科に問われようとも、あえて諫言申し上げる」というものです。

徽宗は怒り、永道は火印をあてられ(焼きゴテによって烙印を押される)、さらに、江南の道州、春陵という所に流されました。しかし、後に都が大洪水にあい、道教に頼っても水は引かず、徽宗みずから仏像をふたたび安置して祈願したところ、たちまち水が引きはじめ、これによって林靈素は失脚、永道は赦免となりました。徽宗は永道に対して法道という名を贈り、さらに一字を立て



て住ませ、宝覺円通法濟大師の称号を贈ったと伝えられています。

## 5 師子尊者(? ~二五九)

中インドの人で金口相承といい、釈尊から代々、直接、師匠から弟子へと、法灯を伝承してきた付法蔵第二十三祖(釈尊を入れて数えれば第二十四代)に当たる人です。その師は第二十二祖の鶴勒那で、後に北インドの 賓国(カシミール)に弘通しました。この国の時の王は弥羅掘(檀弥羅)王といました。この王は仏教に帰依していましたが、日毎に仏教が盛んになるのを嫉み、外道の摩目多、都羅遮という二人が王宮に忍び込み仏教僧侶の姿をして悪事をはたらき逃げ去りました。王は怒って伽藍を壊し、僧侶を追放し、さらに師子尊者にみずから剣を持って迫りました。そして、「師、よく生死を離れたりや(迷いを断ち、生死を超越しているか)」と問います。それに対して、「既に生死を離れたり」と答えます。さらに王は、「しからば吾に汝が頭を施さずや(では私があなたの首を頂いてよいか)」と問いますと、「なんぞ、おしまんや」と答えましたので、剣を抜いて頭を切りますと、知ではなく父が吹き出し数尺の高さまで登り、同時に王の右肘が地に墮ちたと伝えています。そして、七日にして、王も死に、光首という皇太子は恐れて尊者の遺体を奉じて塔を建てたと五燈會元という書物に出ています。

他にも付法蔵因縁伝第六(正蔵五十 三二一)・仏祖通載などに伝説が出ています。

とにもかくにも、この師子尊者をもって金口相承は絶えてしまいました。

## 6 天台大師は南三北七にあだまれ

天台大師(五三八~五九七)は梁・陳の時代から隋代にかけて中国仏教を統攝し天台教義を樹立した偉大な方で天台宗の開祖です。

慧文・慧思の相承を受けていますので、そこから数えて天台第三祖ともされます。荊州華容県(湖南省北端)の生まれで梁朝高官の陳起祖の子です。ですから姓は陳、字は徳安、幼名を王道、光道といました。十八歳で湘州(湖南省長沙)果願寺で法緒について出家、智 と称するようになりました。戒律を受け、法華経、無量義経、普賢観経などいろいろな經典を開き研鑽し、しばらく修行

した後、二十三歳(五六〇)にして光州大蘇山にあって名声を博していた慧思の下に至りました。慧思は「昔、靈山に同く法華經を聴く。宿縁の追ふ所、今復た来る」といい、昔、あなたと私は共に釈尊が法華經を説かれているのを聴聞しました。因縁のしからしめる所、今、また師弟として再会したのですと言ったということです。その慧思の指導のもと、法華三昧を修めて智 は開悟したといわれています。

その後、師命により多くの弟子と共に金陵(南京)に入り、瓦官寺で法華經經題について講義、大智度論、次第禪門などを講じました。

陳始興王や高官である除陵・毛喜などが帰依し、多くの人に引き留められながらも金陵を去り、三十八歳の時、天台山の山中に入りました。

その後、陳の宣帝がたびたび、天台山を降りるよう懇願しましたので、断れず靈曜寺に住することとし、宮中、太極殿において仁王般若經を講義いたしました。

この時、天台大師は江南の三師と江北の七師の説をすべて破し、折伏されたのです。この時代は像法、摂受の時で、特に折伏を表立ってする時代ではなかったのですが、釈尊が一番大事にされている法華經が埋もれ去ってしまったのは困りますから、摂受の中(摂受が家)の折伏を天台大師はされたのです。この南三北七については後で記します。

陳の禎明元年(五八七)光宅寺において法華經を講義(法華文句)、開皇九年(五八九)、天下は晋王広に帰し、隨の時代となり晋王広は煬帝と称して中国に君臨しました。煬帝もまた、天台大師に帰依し、開皇十一年(五九一)、王は大師によって菩薩戒を授けられ、反対に王は大師に智者大師の称号を贈りました。

その後、開皇十三年(五九三)荊州に玉泉寺を建立し、法華玄義を説き、さらに翌年、法華經の実践法である「摩訶止観」について講じました。そして、開皇十五年(五九五)には金陵において「浄名義疏」を著し、その後、死期を悟り天台山に帰り、多くの弟子に観心論を口授講義し、その二年後、六十歳をもって入滅されました。

あくまでも天台大師は迹門法華經を弘める使命を帯びていたため、実践法としては止観、観法という方法によって法華經の迹門の深い教理を悟ることを教えられました。同じ法華經に依るといっても、本門法華經を中心にして御題目

の経力現証による救済をめざされたお祖師様とは、すべてが天と地、水と火のように違いますが、それは時代の相違によるのです。

今、末法という時代にあっては天台宗は謗法でしかありませんが、天台大師の活躍されていた像法という時代には迹門法華経こそ弘めるべき教えで、これによって権教(法華経以外の方便の教え)を破折するのが天台大師の使命であったのです。

法華経について講義、口述したところを弟子の章安大師灌頂が筆録したものが上記の法華玄義、法華文句、摩訶止観で、これがいわゆる天台三大部と呼ばれているものです。そのほか維摩経、金光明経、観音経などの玄義と文句(疏、註釈)、そのほか六妙法門、天台小止観等の観法の撰述など数十部にのぼる著作があります。

#### 南三北七について

法華玄義で天台大師が批判した江南の三師と北地の七師の説で、いずれも教相判釈の説です。教相判釈とは中国には、インドから大乘、小乗、あらゆる経典が次々に将来、翻訳されてきました。その結果、経典の比較研究が起こり、各経典をどのように位置づけて捉えたらよいか、何がもっとも重要か論議されるようになったのです。

天台大師に先立つ時代、中国で最も重要視された経典は華嚴経と涅槃経でした。華嚴経は「初発心時便成正覚」(初発心の時にすなわち正覚を成ず)と説くように、すみやかに成仏をもたらす経典 頓教として、涅槃経は一切衆生に仏性があり成仏できることを保証する仏性常住の教え、常住教として珍重されたのです。そして、その他の法華経や般若経などの経典を両者の間にどのような位置づけで配置するかという考え方によって南三北七それぞれの教判が生まれたのです。

#### 江南の三師とその説とは

炭師による有相・無相・常住の三時教

宗愛・僧旻による有相・無相・同歸・常住の四時教

僧柔や慧観による有相・無相・抑揚・同歸・常住の五時教

という分類です。

北地の七師とその説は

人天・有相・無相・同歸・常住の五時教

菩提流支による半・満の二教

慧光による因縁・仮名・誑相・常住の四宗

因縁・仮名・誑相・常住・法界の五宗

琳法師の因縁・仮名・誑相・真・常・円の六宗

北地禅師の有相・無相の二宗

一音教

以上の教判が立てられました。

天台大師は、これらを厳しく批判して法華経を最重要視し五時八教の教判を立てたわけですが、ある意味では五時八教説はこれら南三北七の説を集大成したともいえるのです。

#### 7 伝教大師は六宗にくまれ給へり

伝教大師・最澄 神護景雲元年 (七六七年、一説に七六六年～

弘仁十三(八二二)

日本天台宗の開創者であり、お祖師様は終始、伝教大師だけが日本では法華経を本当の意味で読んだ人であるといわれています。

開目抄に

日蓮云く、日本に佛法わたりてすでに七百余年、但伝教大師一人計り法華経をよめりと申すをば諸人これを用ひず。(昭定五四九)

また、

像法の中には天台一人が法華経、一切経をよめり。南北これをあだみしかども、陳、隋二代の聖主眼前に是非を明めしかば敵ついに尽きぬ。像の末に伝教一人法華経、一切経を佛説のごとく読み給へり。(昭定五五八～九)

また、

日本国に此法顕るゝこと二度なり。伝教大師と日蓮となりとしれ。

(昭定五八三)

四信五品抄に

爰に延暦年中に一りの聖人有って、此の国に出現す、所謂伝教大師是れ也。

此の人先より弘通する六宗を糾明して七寺を弟子と為し、終に叡山を建てて本寺と為し、諸寺を取って末寺と為す、日本の佛法唯だ一門也。王法も二つ非ず。法定まり国清めり。

(昭定一二九九)

と、天台大師とともに非常に尊崇されています。

伝教大師は近江滋賀県の帰化人系の三津首浄足(百枝)の第二子で幼名を広野と称しました。これも二通りの説がありますが、宝亀九年、十二歳(十三歳)で近江国分寺の行表(唐よりの帰化僧、道の弟子に弟子入りし禅宗の教えをを受けました。

宝亀十一年、十四歳で得度したことは証拠の書類(得度の手続きに関する国府牒や得度の証明書の度牒の案が現存)があり疑うことはできません。法華経、最勝王経、薬師経、金剛般若経などを読み修行し、十九歳の時、東大寺で受戒して程なく、比叡山へ入り、六根清浄、相似の位を得るまでは山を出ない覚悟で修行に励もうとしました。(叡山に入ったときの願文〔自筆の誓願文〕が存在する)

近年の研究では、叡山に入る前から天台大師の「小止観」を読み感激して願文を作成したという説があります。(これは天台大師学者 関口真大氏の説)

また、全面的には信用できない史料ですが叡山大師伝という伝記が残っており、その中で伝教大師は叡山入山後、華嚴宗関係の典籍である「起信論疏」(華嚴宗の第三祖、法蔵の著でインドの馬鳴作とされる大乘起信論の註釈書)や「華嚴五教章」(法蔵)などを見ると天台を指南としていることを知り非常に読みたく思った、たまたま天台の法文(典籍)の所在を知っている人に会えて、奈良時代の天平年間に中国から鑑真が将来した「円頓止観」「法華玄義」「法華文句疏」などを写すことができたことと記されています。しかし、泉日恒上人は、天台への傾倒は叡山入山以前で、その前に伝教大師は天台の典籍を筆写しているとされています。その経緯については、同様のことを高祖は報恩抄に述べられています(昭定一二〇七~八)、そこでは年代の順序についてまでは言及されていません。

ともかく伝教大師は叡山に入山後、天台の研究と修行に明け暮れました。

延暦十六年、三十一歳で内供奉(宮中の内道場で読師などの役に仕える僧)に

任ぜられ、翌、延暦十七年(七九八)、  
法華十講の法会をつとめました。

その四年後の延暦二十年十一月に南都(奈良)六宗の十人の僧が招かれて諸宗の法華経についての講義が行わせられ、六宗それぞれの法華経観が問いただされ、伝教大師との間に三乗、一乗についての論議が行われたました。ただ、これについての記録であろうと思われる、伝教大師が中国まで持参した「十大徳を屈するの疏十卷」という書が惜しいことに散逸してしまい詳細は何も分かりません。

さらに翌年の正月十九日、和氣弘世、真綱の請いに応じ、高雄山神護寺において法会の招請状が発せられ、またもや南都の十余大徳が招かれました。和氣氏の意図は天台宗の興隆でした。この法会においても論議が行われましたが、結局、伝教大師の独壇場で、聴衆を代表して三論宗の善議が謝表を奉り「天台の玄疏は諸宗に超えて一道を示し、六宗の学生初めて至極を悟る、今後は妙円(法華)の船に乗って彼岸にすくわれるであろう」と述べ、桓武天皇はこの法会と伝教大師と和氣氏の天台法華思想の興隆の志に随喜されたということです。

この法会については、いったい何月何日に行われたかは、もはや定かではありませんが、とにかくこれが伝教大師の南都六宗に対する折伏であったということになります。先ほどの謝表の中では確かに、南都六宗の大徳は感謝して法会を終えたことになっていますが、実際は決して心穏やかではなかったことは大いに考えられます。その後、伝教大師に対して、南都六宗の大徳達は巻き返しを計り、策謀をめぐらせたのです。

この法会についてお祖師様も言及されています。ただ、お祖師様は延暦廿一年一月十九日という日に法会が行われた旨記載されていますが、最近の研究によれば、これは和氣弘世が伝教大師や六宗の大徳を招請した日付であるとのこと。それと申しますのも、和氣弘世が伝教大師を招請した書簡が現存しており、その書簡の日付が一月十九日であり、また伝教大師が来られる日を想定して、「夏の始めの明日、高雄に降臨して」と記してあるからです。お祖師様が叡山に修学されたのは伝教大師滅後、すでに四百年以上経っており、このような史料もなかったのですから、それはしかたありません。しかも伝教大師の伝記については叡山大師伝ではない別のものを参照されていたようで、その方

がむしろ、正確な伝記だったと思われます。ですから、内容についてはお祖師様の書かれたものの方が基本的に叡山大師伝より価値が高い史料であるといえましょう。お祖師様はこの件について

延暦廿一年正月十九日高雄寺に於て南都七大寺の六宗の碩学、勤操、長耀等の十四人を召合せ勝負を決談す。六宗の明匠一問答にも及ばず口を閉づる事鼻の如し。華嚴宗の五教、法相宗の三時、三論宗の二蔵、三時の所立を破し了んぬ。但自宗を破らるゝのみに非ず、皆謗法の者たることを知る。同じき二十九日皇帝勅宣を下して之を詰る。十四人謝表を作りて皇帝に捧げ奉る。

(安国論御勘由来 昭定四二二)

日本国の人皆謗法の者の檀越たるが、天下一定乱なんずとおぼして六宗を難ぜられしかば、七大寺六宗の碩学蜂起して京中烏合し天下みなさわぐ。七大寺六宗の諸人等悪心強盛なり。而るを去る延暦二十一年正月十九日に天王高雄寺に行幸あつて、七寺の碩徳十四人、善議、勝猷、奉基、寵忍、賢玉、安福、勤操、修園、慈誥、玄耀、歳光、道証、光証、観敏等の十有余人を召し合す。華嚴、三論、法相等の人人各各我宗の元祖が義にたがはず。最澄上人は六宗の人人の所立一一に牒を取りて、本経本論並に諸経諸論に指し合はせてせめしかば、一言も答えず口をして鼻のごとくになりぬ。

(報恩抄 昭定一二〇八)

と、そのときの状況を記されています。

このようにして、その時代からいえば、決して折伏の時代ではなかったのですが、伝教大師はただ、真実法華経の広宣流布をひたすら願うあまり南都六宗の破折を堂々で行い、その結果、この法会の後、中国に還学生として渡ったまではよかったのですが、帰国の後よりその入寂に至るまで苦労されることとなりました。

(ここでは、その後半生については省略し、後にふれます。)

註\* 1 法華行者値難抄 昭定七九七

註\* 2 中には誤解して、一部の經典に釈尊は靈魂の存続や世界は有限か無限かなどという形而上学的質問に対しては、沈黙を守り答えられなかった(捨置記)と説かれていることをタテにとって、仏教では死後も存続する靈魂「ど認め

ていないなどという人がいます。しかし、仏教学者の中村元博士は、  
「仏教の根本思想は無我説であるといわれている。しかし『無我』という語は、非常に誤解をひき起し易い。初期の仏教においては、決して『アートマン(我)が存在しない』とは説いていない。むしろウパニシャッドなどの思想と多分に密接な連関をたもちつつ、独自の実践的倫理的なアートマン論を展開しているのである。ただウパニシャッドの哲学が、ややもすればアートマンを形而上学的実体視しているのに対して、仏教はこのような見解をはっきりと拒否した。そうして、本来の自己(アートマン)ならざるいかなるものにもよることなく、ひたすら本来の自己を追求し、そうしてそれによって現実の人生における苦を超克しようとしたのである」

(「自我と無我」六〇頁 平楽寺書店)

と述べておられます。

釈尊のご入滅後かなり経過した後代の小乗部派仏教では確かに、説一切有部のように靈魂というものを認めていないところもあります。しかし、原始經典では輪廻(生まれ変わり)を当然の事実として認めています。(同書一〇〇頁)そして、当然ながらその輪廻の主体を想定している(一一五頁)のであり、それを人間の五つの構成要素 五蘊の中の一つである「識」(認識作用)であるとする傾向があり、原始經典の中にも積極的に輪廻の主体を想定するものがあります。(九一頁)

やがて部派仏教の經量部や正量部、犢子部などでは、それぞれなんらかの輪廻の主体を想定して名前を付けました。(一一六、七頁)これは、大乘仏教でも同様であり、中觀派と並んでインド大乘仏教の二大潮流を形成した唯識派ではアーラヤ識を輪廻の主体と考えています。以上のことから、決して仏教は無靈魂論ということはできません。しかし仏教では一貫して、形而上学的原理とか固定的、不変の実体としての我とか靈魂、つまり思惟の対照としての靈魂については、その存在も、それについて語ることも避けようとする一方で、行動の主体、因果応報を受けとめる主体、輪廻の主体としての靈魂については、当然の了解事項、大前提として認めているのです。